

国外実態調査報告書

テーマ : シンガポールの日系企業でのインタビュー調査
シンガポールマネジメント大学の授業参加と学生交流
シンガポールビジネスショー参加

ゼミ名 : 栗原 文子 ゼミ

調査日 : 2023年8月29日(火)～9月3日(日)

調査先 : 【シンガポール】会計事務所、和食レストラン、シンガポール国立博物館、
ビジネスショーなど

授業科目名 : 国際教養演習Ⅰ・Ⅱ

参加学生数 : 5名(3年生)、1名(4年生)

調査の趣旨(目的)

シンガポール実態調査の主な目的は、以下の3点である。

1. 日系企業を訪問し、日本とは異なるビジネス環境で働く日本人や移民の外国人労働者に、インタビューを行い、日本とのビジネス習慣の違いや従業員の雇用や育成について理解を深める。
2. シンガポールマネジメント大学の Problem-based Learning の英語コミュニケーションの授業に参加し、シンガポール人の学生と交流をしたり、独自の英語カリキュラムについて学ぶ。
3. シンガポール国立博物館を訪問し、建国わずか60年足らずのシンガポールの歴史、イギリスの植民地、日本統治時代、多民族国家を繁栄させていくうえでの言語や文化政策について学ぶ。

調査結果

1. 日系企業訪問

学生は事前学習として、外国企業が多く進出するシンガポールの特徴について調べ、現地で訪問するために、コンタクトを取った。現地では、外食産業のスシロー様、酢重様、物流企業の山九様、会計事務所の Spina Partners 様を訪れ、貴重なお話を伺うことができた。例えば、Spina Partners を訪問した学生は、請求書の管理について質問をしたが、シンガポールでは2019年に電子インボイスの導入の後押しが政府指導で進められていること、AIを使って領収書が自動でスキャンされていることなどについて説明を受け、スピード感をもってシステムの変更を進めていることを実感した。また、スシローを訪問した学生は、現地の従業員に英語でインタビューを行い、辛いもの好きのシンガポール人に合わせてメニューを工夫したり、日本から輸入しているお茶は有料であること、日本らしさを表現するためにメニューに日本語を使用していることなど多くの違いや工夫を理解することができた。

2. シンガポールマネジメント大学訪問

中央大学の提携校でもあるシンガポールマネジメント大学では、Problem-based learning

で行われている英語のライティングの授業 (Reasoning and Writing) を見学し、学生や教員と交流をすることができた。最初に、授業担当の教員から1時間ほど、カリキュラムについて説明を受け、この授業が開発された背景を教えていただいた。デジタルリタラシーと批判的思考力を鍛えるこの授業は、学生たちがグループでディスカッションをしながら、インターネット上の情報を、根拠に基づき、妥当かどうか判断する手法について、事例を用いながら、検証していた。学生たちは、SMUの学生やTAに話しかけ、SMUの学生の積極的な取り組みや課題解決に対する意欲を目の当たりにし、大いに刺激を受けた。

3. シンガポール国立博物館訪問

博物館はシンガポールに人が住み始めた頃から展示が始まり、イギリス東インド会社のラッフルズが「商業の自由」の原則に立ち自由港を作った時代、中華系やインド系の人々が入植し貿易の町として栄えた時代など、時系列で理解することができた。また、3年半にわたる日本の統治時代のシンガポール (Shonanto) に関する展示も多くもあり、学生たちにとって日本とシンガポールの関係を異なる角度から学ぶ機会になった。ちょうどリー・クアンユーの生誕100年を記念して、指導者として彼が行った経済、言語、教育政策に関する資料の展示や演説の放映もなされており、シンガポール建国の父であるリー氏の信念やリーダーシップを学ぶことができた。



SMUの教員からレクチャーを受ける



SMU の学生とランチ



シンガポール国立博物館



シンガポール白門会との交流会



酢重シンガポールにてインタビュー